

木下杢太郎日記

第五卷

木下奎太郎日記 第五卷

第五回配本(全五卷)

一九八〇年七月三十一日 発行

定価 三〇〇〇円

著 者 太 田 正 雄

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 千 101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
株式会社 岩 波 書 店

電話 (三三六五) 四二二
振替 東京六二六三〇

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

〔インドシナ紀行 昭和十六年四月―七月〕	三
昭和十六年	一〇九
昭和十七年	一四三
昭和十八年	二五
昭和十九年	二七七
昭和廿年	三五九
百花譜	四六九
補遺	五六五
後記	五七三

目
記
五
昭和十六年—昭和二十年

「インドシナ紀行 昭和十六年四月―七月」

四月卅日

六時四十分羽田發

井原夫人 正一、昭子、和子來り送る。

東京より相模の邊下界雲深くしてよく窺ひ難し。

各シャツ二枚、ズボン下一枚、紺單衣、外套にて

肌寒く、脚殊に冷ゆ

7.20 高度1,300 間もなく大井川 静岡

7.40分 濱名湖 高度1500 時速260.

8時半 大阪. 1500 今迄450 コレカラ500 Kilo

→23(=74) 急ニ脚温クナル. ソレマデ冷タカリキ(24=76°C) 8^h50 淡路島

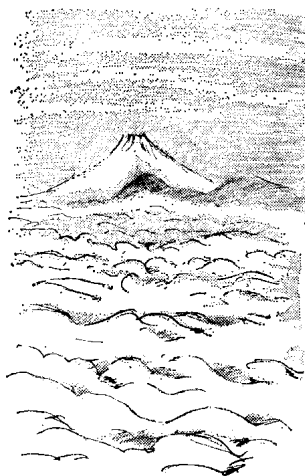
9.40 松山 高度500

10時半頃福岡着 青木氏ノ弟ノ媳トソノ幼兒

福岡雁ノ巢に降下の時尤もゆる。他の飛行場にてはかゝる格段の變化なし。

昭和十六年四月卅日
六時四十分羽田發





○福岡にて伊東と西片町に又皆見君のところに葉書

2時20 那覇飛行場着陸

飛行場内ニ内地ト異リタル植物有リ。植物十數種

採集

2.47 離陸ノ爲メノ滑走

5.12 臺灣(松山飛行場)着

(空白)

臺北。外事係の田中 氏及秋間泰造君飛行場に出迎
朝陽號に宿す。

三田村に電報うつ

臺灣日ミ記者若林修二探訪、

夕刻七時賓來閣にて東北醫學部の(臺灣長陵會)にて堀
内大佐の歡迎會あり、丁度的好機として迎へらる。出

席者(大型手帖)鹽澤、董、大塚、渡邊、畠山、佐藤、

木下、岡村、田村、秋間、楠、酒井、宮坂、堀内、桂、

細谷、羽鳥十八人。

かへり秋間君と歩み歸る。赤煉瓦、コロナード造り。

長陵會は名稱を變ず。

井原君には婦人科(眞柄氏)來訪あり。

高橋信吉君「七日八日」を東京に送れども、つひに手に入らず

(空白)

臺灣日ニ新聞木曜日「國語普及功勞者表彰」の記事あり、
□八氏「國語不可解者」を一掃の文稿あり。

五月一日

朝八時半ごろ高橋信吉君自動車でたづね来る。その自動車で(夫人も同車)井原君と先づ三田前總長の家にゆきたづねる。十數分の後辭して、植物苑にゆく。迎に來べき筈の自動車が來なかつたので、それを待つ爲めに夫人が残つた。

植物園は小さいが熱帶地方の植物をあつめてあつた。臺灣の植物はさうなかつた。椰子の並木道を通る。

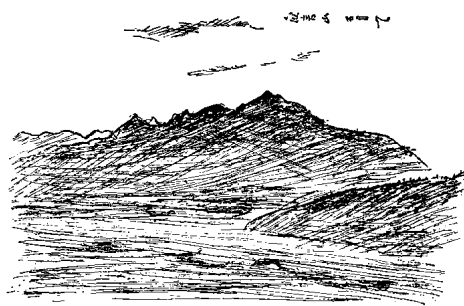
林業の標本を陳列する支那家屋に入り見る。その門の兩側には二人づつの人物が大きく畫かれてあつた。

明治神宮の鳥居にしたといふ樹齡千餘年の大檜の斷面、

フトモモの黃花、珊瑚刺桐の紅花、萩の如くして巨大

五月一日 午前十一時

三田邸 植物園、總督府、臺灣神社(高橋信吉君同車)から歸り、浴衣にかへ、籐椅子の上に横はり



佛蘭西文法をよんでゐる。そよかぜがやゝ肌寒く通ふ。日本に於ける七月の氣分が頭をつつむ。外では熱帶樹の青葉が日を照りかへしてゐると想像する。白と紅のんだら幕、榕樹、珊瑚刺桐が蒸氣を吐出してゐる雰圍氣を想像する。

島田謹二 臺北高等學校教授
大學講師 福住町四六
電六五七三より電話

十一時半ごろ黃得時（文學士、興南新聞文化部、自宅臺北市宮前町二三七、電七六四〇）來訪

零時過、醫專大村氏（井原氏友人）來訪

草山 高橋信吉君、秋間泰藏君、井原君と

北投、佳山閣

峽口村遙煙颺時四圍草樹晚風吹
倚欄坐到斜陽暗飽喻西山夾氣宜

佳山閣所見 天隨

東京を朝たち、夕臺北につき、時、空間の觀念甚だうすし。その上にこの溫泉町の家造り日本風、植物を除いては異境の感甚だ少し。觀音山は北投より見ると、全く觀音の横顔のやうである。その形（上）左圖の如し。

北投の一廓は溫泉旅館、料理屋なり、然し雜沓なく靜かなり
 夜北投驛まで歩く、それから電車で臺北にかへる。此間數驛、かなり遠きなり。

夜十時過人力車で宿にかへる

島田謹二、黃得二の二君待ち居り、三十分ばかり話し歸る。島田君左の書をかす

Roland Lebel : Histoire de la littérature coloniale en France (Les Mannels coloniaux). Paris V^e, Librairie
 Larne, 1931.

五月二日

午前八時過上川豐君來話

朝六時半起、Lebelをよむ。

武田教授(細菌)來話 上川豐氏來話

午前十一時半鐵道ホテル。臺灣醫學諸教授の歡迎を受く。

食卓如之

武 田

中修三 精神

酒井(潔) 小兒科

高橋 信吉

上村親一郎院長

和氣巖 病理

武藤 病理(もと癌研に在り)

竹中繁雄 生理

金關丈夫 解剖(人類學)京都出

予

森	於菟
横川	實
小田	俊郎 内科
桂	重鴻
森下	薰

井原	河石
細谷	

一時半了。一旦歸宅。上川豐君自動車で迎ひに来る。

樂生院に至る。巡觀。(新莊を通る)

半時間ばかり話。

同じ自動車にて歸宅、一睡

夜井原氏友人岸田秋彦來話(傳研、佐藤秀三君の處に在り。又イランのテヘランに四年間滞在。今熱帶醫學研究所々員)

八時半桂重鴻來話。一身上の事につきて相談をかける。十時歸 一浴

神田喜一郎、島田謹二、南菜園の詩人穀山衣洲^上、中、臺大文學十五年十月十二月

島田謹二 臺灣に於けるわが文學

” ” の文學的過去に就て

伊能嘉矩「臺灣文化史」^(志)(昭和三年) 沈光文「文開詩集」(明末) 郁永河「臺灣竹枝詞」 孫元

衡「赤嵌集」

征臺直後の内情を詠へるわが漢詩「うしほ」と「ゆうかり」原十雄の「御祈禱」「山おくの櫻ばな」「臺灣に取材せる寫生文作家」庄司瓦全、影井香橘「征臺陣中の森鷗外」「西川滿の詩業」

石田幹之助君四月廿九日夜九時ごろ婚禮に列したるあと尋ね來られ「長安の春」を予以贈る。

長安の春「胡旋舞」小考 當壚の胡姬 西域の商胡、重價を以つて寶物を求むる話 再び胡人採寶譚に就いて 隋唐時代に於けるイラン文化の支那流入 長安盛夏小景 後語

五月三日

七時起、Lebelを抄す。

九時出、博物館

十時半より十一時半まで植物園々長正宗嚴敬氏(臺北帝大理農學部教授、臺北帝大附屬植物園長)十二時、バス及び人力車にて歸館

十二時十五分、島田、黃兩氏迎へにくる。自動車にて黃氏邸(宮前町)ゆく。

神田喜一郎 矢野峰人(禿、長髮) 西川滿 山中樵(臺灣總督府圖書館長)「音響ク

話題、島田、明星、スバル時代の事を尋ぬ。岩生氏の事、そのパタヒヤの項を省けること。村上直次郎氏の事、山田長政の事、初期臺灣文藝(殊に漢詩の一派)の事、

黃氏邸、宮前町のま中、其庭園未成。壁に沿うて三四の榕樹、洋風應接間、食堂別室(江山樓の料理)、

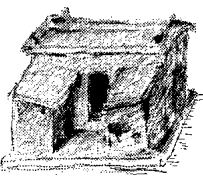
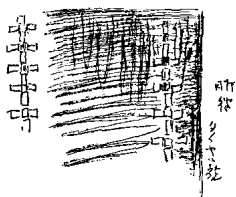
猫

午后四時より五時半休息又午睡

六時眞柄〔空白〕氏來り迎ふ。夜江山樓宴。(傳研關係者)

窗外に空地有り、そこにバザアが出来てゐる。食後燈のついたのち、そこは繁錯を極めてゐた。殊に飲食をひつさぐ店が一層さうである。例へば目下に麵を賣るものがある。老壯の

二人が坐して之を命ずる。主婦は手で麵をちぎり、それを小さな柄のついたかごに入れ、常に煮てゐる汁の中に浸す。少時してそれをあげ、そのざるのしたたりを茶碗に入れ、それを鍋にかへし、麵をあげ、菜、香料を添へ、再びかの汁の一部を交へ、猪腿一片を添へて客にすすめるのである。その他菜をならべた店、また日本の下駄を賣る店などが見られる。



Nelumbo lutea (Linn.) Pers.
ハルハル 蓮花

